銀魂――遠い記憶――

冬瀬志保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀魂――遠い記憶――

【Ｎコード】
Ｎ９１７７Ｕ

【作者名】
冬瀬志保

【あらすじ】
一年中雨が降る、じめじめとした街に、その少女は住んでいた。白い肌、チャイナ服、番傘、そして夜兎の血――。同年代の子供たちに避けられ、嫌われ、いじめられていたその少女を救ったのは、紛れもない、大切な家族だった。
この物語は、まだ神楽が自分の星に住み、家族と共に住んでいたころの話です。

ご挨拶

初めまして、の方も、また会いましたね、の方も、こんにちは。
「銀魂――土方葵の真選組日誌」をお読みになられた方は、もうご存知かもしれませんね。
冬瀬志保です。

今回も、またもや銀魂の二次創作です（＾＾；）。

あまりにも「土方葵の真選組日誌」が猛スピードで書きあげられるため、何か他に書くものはないか、ということで、この物語を書きました。

これは、まだ、神楽が自分の家族と暮らし、銀さんや新八に出会う、ずっと前のお話です。

暇な方は、どうぞ読んでみてください＾＾。

ご挨拶（後書き）

多分、この物語は、神楽が地球へ向かうまで続きます。

1．プロローグ　其の一（前書き）

「銀魂――遠い記憶――」、連載開始しました！

ぜひ読んでみてください！

1．プロローグ　其の一

一年中、雨ばかり降る街。日の当たる道を、堂々と歩けない人間ばかりがうろつくそんな街に、少女は住んでいた。

広間と、トイレと、風呂場と、それから、小部屋が一つある家。一見、少しだけ小さな家に聞こえるかもしれないが、広間は「広い」「間」と書くにも関わらず、布団二枚と、小さな卓袱台、それから箪笥を置くので精いっぱいの小さい部屋だったし、残りの一間にも、大人用の布団と、子供用の布団が、それぞれ一枚ずつ敷かれてあるだけなのに、それ以上何かを置くことはできなかった。

父は「えいりあんばすたー」という職業柄故に、家には滅多に帰ってこない。だから、少女の母親は、寝るときはいつも、布団が二枚あるのにもかかわらず、一人で広間で眠っていた。

兄は、朝から夕方まで力仕事をどこかの家でこなし、給料をもらって帰ってくる。少女の家の家計は、兄からもたらされる、このほんの少しの収入で賄われていた。

少女は、毎日毎日どこへやら遊びに行き、泣いて帰ってくる。――夜兎という種族故の宿命だった。

少女の名は、神楽。現在、江戸はかぶき町、万事屋銀ちゃんというところで働いている少女である。

この物語は、その少女が、まだ万事屋に入る前の話である。

2. 兄妹

ザァァーッ……。

雨が降る。雨音が響くあたりの空気に、少年たちの怒号が入り混じる。

「ほらほら！いじめてやろうぜ！」

少年たちが、橙色の髪の少女に殴りかかった。

「やめて！痛い！」

少女が叫ぶのにも関わらず、少年たちは乱暴をやめない。少女はもう諦めた。自分を認めてくれる人なんていない。自分の言っていることなんて、誰も聞いてくれやしないんだ。

「何だよ！もう何も言わないのかよ！もっとやれ！」

さらに少年たちの暴行はエスカレートする。ふと、その時、後ろから大人びた少年の声が聞こえた。

「こら！うちの妹に何をしているんだ！」

少女をいじめていた少年たちは、後ろから来た少年が、持っていた傘を投げ捨てながら少女に駆け寄ろうとするのを見て、顔を引きつらせて、逃げ始めた。

「こ、今度またいじめに来てやる！楽しみにしてろよ！」
捨て台詞を吐く少年たちを見て、少女の目に大粒の涙が浮かぶ。そんな少女を、兄であるその少年は、ぎゅっと抱きしめた。
「ほらほら、泣かないの、神楽。」
神楽と呼ばれた少女は、兄に言われ、ひっくひっくとしゃっくりを上げながらも、必死で涙があふれるのを抑えようとする。少年は、妹を軽々と腕に抱え、家の帰路をたどる。
「大丈夫だよ。俺がいるから、もう安心だ。」
妹と同じ髪の色をしたその少年、神威は、優しい声で、妹を慰めた。
「兄ちゃん。兄ちゃんだけは、私の言うことを聞いてヨ。」
神楽に言われて、神威はもちろん、と頷く。
「家に帰ったら、好きなだけ話しな。兄ちゃんが聞いてあげるから。それとね、今日の晩御飯、久しぶりに卵かけごはん。」
その言葉を聞いて、神楽の顔が輝く。
「ホントアルか！卵かけごはんアルか！」
「そうだよ。気分を直して、おいしく食べよう。」
「うん！」

泣きながらも笑顔が少し戻った神楽の顔を見て、神威は微笑んだ。

―――

「ただいま。」

神威は神楽を玄関に降ろすと、靴を脱がしてあげた。それから、今度は、自分の靴を脱ぎ、広間へ入る。

「ただいま、母さん。」

小さな卓袱台に、神楽と神威と同じ色の髪と瞳を持つ一人の女人が、どんぶりを入れるためのようなの皿を三つ、用意していた。

「あら。お帰り、神威、神楽。」

それから、二人の泥まみれの格好を見て、うふふ、と笑ったが、しばらくしてからマジメな顔に戻ると、子供たちに言った。

「二人とも、何してきたの。泥だらけじゃない。お風呂場に入って、着替えてから御飯よ。」

「はーい！」

兄妹の声が重なる。二人は顔を合わせ、にっこりと笑った。母である女人も、そんな仲の良い我が子たちを見て、ほほ笑まずにはいられなかった。

「じゃあ、一緒に入ろっか。」

兄の申し出を聞いて、神楽は顔に満面の笑みをうかべ、うん、と大きく頷く。

それから、二人は広間にある箪笥の中から、三着しかない服の中から一つ選び、風呂場へと向かった。

――

「ふぅ。さっぱりしたぁ。」

神威の気の抜けた声を聞いて、神楽たちの母、神那は、くすりと微笑んだ。

「さぁ、神威、神楽。食べるわよ。」

見ると、神楽はすでに卓袱台に座り、目の前にある、湯気の立つ白米を、よだれを垂らしながら眺めている。神威と神那は互いを見つめ、再び微笑し、ボロボロの座布団の上に座る。卓袱台は、三人座っただけで、ぎゅうぎゅう詰めになった。

「はい、卵。」

神威は、母に渡された白い殻の卵を受け取り、トントン、と卓袱台の隅で打ち、どんぶりの皿の隣置かれていた、少し欠けている茶碗に黄身だけを入れてから、しゃかしゃかと箸で混ぜ、それから、それらをどんぶりの中に入れた。それから、隣に置いてあった醤油を少し欠け、ご飯と混ぜる。

箸を掴み、いただきます、と言って、最初の一口を食べようとした時、神威の動きがぴたりと止まった。
神威は、箸を箸置きに戻すと、隣に座って、卵を割るのに苦戦している神楽に口を開いた。

「貸してごらん。」

兄に言われて、神楽は神威に卵を渡す。すると、兄は手際よく卵を割り、かき混ぜた黄身を白米と混ぜた。

「兄ちゃん、上手。」

手慣れのいい神威を見つめて、神楽は呟く。妹に褒められた神威は、少しだけ照れた顔を作った。

「い、いや、母さんほど上手くないよ。」

その発言を聞いて、神那は眉を上げる。

「あら、本当は神威の方がうまいのよ、家事とか、料理とか。でも、私は力仕事はそこまで得意じゃないから、仕事を神威に任せて、家事は私がやってるだけ。……ごめんなさいね、神威。お仕事、辛くない？」

神威は首を振る。

「全然。仲間もいるし。」

神那は、その言葉で笑顔になる。

「なら、良かったわ。」

三人で囲い、三人で笑う食卓。神楽は、こんな食事の時間帯が、一番好きだった。

2．兄妹（後書き）

毎日一話以上投稿すると思います。
（夏休みの期間中なので＾＾；）

よろしくお願いします＾＾

3．借金とり

「早く金を返してもらわないと、俺たちも困るんだよ、奥さん。」

ひげ面の男が、神那に鋭い声で言った。

「……だ、だから、今言いましたように、主人が帰ってくるまで、お待ち下さいと……。」

「アンタの主人はいつ帰ってくるんだ！」

男が怒鳴った。神那は、肩をびくつかせる。

「早くしないと、ここの家を売り飛ばすことになるぞ。」

「そ、それはできません！」

必死で、神那は男には向おうとするが、それ以上返す言葉がない。

「おい、いい加減、いい返事をしてもらわないと……。」

神那の首元をつかむと、男は険悪な顔で神那を睨みつけた。

「……痛い目に遭うぜ。」

神那は、何も言わない。……言えなかった。

「何か言え！」

男が凄まじい剣幕でそう言い立てる。神那の身体に、震えが走った。

「何か言えって……。」

殺気のこもる目で、男が、こぶしをふるった。

「言ってるだろ！」

だが、その瞬間、男の腕ががしりと誰かに攫まれた。

「……母に何をしているんですか。」

それから、目をかっと見開くと、その人物おは男の顔面を殴った。男の鼻が、固い拳とぶつかった瞬間に、嫌な音とともに折れる。倒れた男は、現れた青年――神威の顔を見て、ひぃっ、と小さな悲鳴を上げながらずりずりと後ろへ引き下ががった。

「母は、父が帰ったら、ちゃんとお支払する、って言ったんです。今日は、お引き取り願います。」

男は、震えながら、逃げ去って行った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「……嫌がらせだよ。俺がいない間に、母さんを狙うなんて。」

食器を洗いながら、神威が呟いた。

「ごめん、母さん。俺が家にいたら、こんなことにはならないのに

ね。……神楽が、もう少し大きくて、強ければいいのになあ。」

その声に、縫物をしていた母が返す。

「無理言っちゃダメよ。それに、これもすべて、母さんが病弱だからなのよ。……身体だけじゃない、精神共に、弱いの。私に落ち度があったわ。……神楽やあなたに、迷惑をかけないように、全力を尽くそうと思ってはいたんだけどね。」

「母さんのせいじゃないって。」

そう言って、神威の食器を洗う手が止まった。

「母さん、そう言えば、神楽は？」

神那は、尋ねられて、手を動かしながら答える。

「お友達と遊んでるんじゃないかしら？」

その答えを聞く度、神威の心は締め付けられる。……神楽は、神那を傷つけないために、言っていないのだ。自分が一人ぼっちだということを。

「もうすぐ日が暮れるから、俺、迎えに行ってくる。」

濡れた両手を手ぬぐいで拭くと、家を出た。

3．借金とり（後書き）

感想などがあれば、ぜひお送り下さい（＾＾）

4. 父

「わーん！」

曇天の下。一人の少女の泣き声。

そこに近づくのは、少女の兄である、神威。

……ほうら言わんこっちゃない。

苦笑すると、神威は神楽に近寄り、頭に手を乗せた。

「何やってるんだ、こんなところで。今日も母さんに叱られるよ。」

「グスッ。」

涙を拭いた神楽は、兄に向って頷く。そして、立ち上がった。

ふと、その時、何者かが後ろに立った気配がして、神威は勢いよく振り返った。

借金とり？

「よう。」

違った。母と神楽、そして、無論自分が常日頃会いたかった人物――。父の、星海坊主であった。

「パピー！」「父さん！」

親子は、しっかりと抱き合い、久しぶりの再会を喜んだ。

「どうだ？母ちゃんは元気か？」

尋ねられて、神威ははっとした。

そう。父が帰ってくるということは、すなわち、借金とりに金を返さなければならないということだ。母が借金とりに提示した期限は、父が帰ってくるその日。つまり、今日。

最悪のタイミングとはまさにこのことだ。

神威はため息をついた。今すぐ言いたかったけど、神楽の前で、到底そんな話ができるはずない。なにせ、神楽は……。ただでさえ、心に闇を抱えているのだから。夜兎という、宿命を……。

「……あ、うん。元気。この頃、体調崩してるみたいだけど、大かた風邪だろうし、平気。」

星海坊主が、少しだけ顔を曇らせる。

「そうか。……とにかく、家に帰ろう。ここで立ち話もなんだからな。」

その言葉に、兄妹は頷いた。

――

「ただいま！」

遅かった兄妹の帰りの声を聞いて、広間にいた母が、急いで玄関に足を向ける。そして、夫の顔を見て、驚いた表情を浮かべた。

「あなた……。」

「ただいま。」

神那の顔は、ほっとしたような、しかしそれでいて、不安のような、何とも言えない顔になる。

しかし、すぐにいつもどおりの笑顔になると、三人を家に迎え入れた。

「三人とも、お風呂入ってきなさい。こんなにグショグショじゃ、ご飯食べられませんよ。」

「はーい！！！」

父子は大きな声でそう返事をし、風呂場へ向かった。

4．父（後書き）

一日一話以上とか、とんだ嘘つきましたね、私。

久しぶりの更新です。

待っていてくれた方々、本当に申し訳ありませんでした。

（待てよ？待ってくれてる人なんて……いるのか？？？？？）

5．夜兎の血（前書き）

神威視点で、物語は進みます。途中から、神楽に変わります。

5. 夜兎の血

「うーさぎ、うさぎ、なーに見てはーねるぅ。十五夜おーつきさーん、見てはーねーるぅ♪」

浴槽の中で歌う神楽を見て、神威は、ごしごしと身体を洗ってたが、思い出したように動きを止め、口を開いた。

「そう言えば今日は、十五夜の夜だったね。後でお月さま見ようか。」

神楽は笑いながら頷く。

「そういや、地球とか言う星によってきた。月見の饅頭を買ってきたんだけど……みんなで食べる？」

「うん！！」

元気よく頷く妹と娘を見て、父と兄は微笑む。

……こういう、普通の家族がいい。夜兎何かじゃない、普通の家族が。

だが、こんな日常は、長くは続かなかった。

――――――――――――――

――――――

「兄ちゃん！昨日のお月見、楽しかったアルな！！」

神楽の発言に、神威は大きく頷く。

分かれ道に来ると、神威は右側の道に足を向け、神楽に手を振った。

「今日は、泣かされずに帰ってくるんだよ！何かあったら、兄ちゃんが来てやるから！」

「うん！」

腕がもげるかというほどブンブンと手を振る妹を見て、兄は苦笑いして、背を向ける。

……あの仕事場へは行きたくない。出来るものなら、ずっと神楽の隣にいたい。あんな下衆な連中といれば、いつか頭が腐ってしまう。

だが、行くしかない。しばらくは、父が持ってきた金で何となるかもしれないが、問題はその後なのだから。

重い足取りで、神威は仕事場に足を踏み入れた。

「神威君。聞いたよ～。家を支えるために、がんばってここで働いてたなんて。お兄さん、知らなかったよ～。」

出てきた。仕事場で一番ムカつく野郎。

「何なら、俺が愚痴を聞いてやろうか？ん？コラア！」

いきなり、男が神威に殴りかかってきた。神威は、身を固くして、その一撃を最小限殺せるように身をねじりながらも、攻撃を受ける。

男も、夜兎だったが、力は神威には遠く及ばない。しかし、反撃してみようものなら、「給料払わない」とでも言われて、それでこそ一文無しの生活に逆戻りだ。今のままを保持したい。

「…ッ。」

「お前も夜兎なら、本能を否定せずに暴れまわればいいだろうが！何で固くなったままでいる！？ん？家族のことなんざ心配せずにかかってこい！テメェが考えてるほど、俺はケチじゃねェ！」

だが、それでも神威は動かない。なぜならヤツは、勝手に約束作って、勝手に約束破く、人間の足もとにおけないヤツだからだ。

「ほら！！」

ドゴッ！！

いくら神威に力は及ばないとは言え、夜兎は夜兎だ。そんな何発も食らっていたら、身体が持たない。

「いいからやれって言ってんだろうが！」

自然に人だかりができ、周りから、「神威！やられちまえ！！！」等という批判的なヤジが飛んでくる。

「いい子ぶってんじゃねェぞ！！」

ああ。別に、いい子ぶってなんかない。でも、自分は一度、神楽に教えたんだ。

そう、あれは、いつものように、雨が降り、曇天が自分たちを押しつぶすかのように広がる日の午後だった。

――――――――――――――――

「兄ちゃん。私、夜兎なんか嫌いヨ。夜兎の自分が嫌いアル。」

そんな言葉に、神威は、なぜだか過剰に反応した。

「何で？」

そう尋ねられると、神楽はしばらくもだしていたが、やがて答えた。

「……たまに、なんでだか自分が制御できなくなるネ。しらないうちに暴れまわってたりして。みんな、私から遠ざかって行くアル。でもその分、悪い奴が、私より強い奴らが私のことからかったり、いじめたりして……。私、夜兎なんか嫌いヨ。」

そう言って、涙を流す神楽を見て、神威は言葉を失った。しかし、しばらくすると、神楽を抱きしめた。

「大事なことを教えるから、よぉく聞いていてね。」

神楽は、大人しく頷いた。

「いいかい、神楽。夜兎って言うのは、宇宙最強の戦闘種族。つまり、この世で一番強い種族なんだ。その力は、善にも使えるし、悪にも使える。どちらか、それを決めるのは、力を持っているお前なんだよ。それは、時には差別されたりして、辛いこともあるかも知

れない。だけど、そんな壁を乗り越えれば、きっと、誰かが待っている。きっと、自分を認めてくれる誰かが、待っている。」

神威は、雨空を見ながら続けた。

「夜兎の血を持つ者は、本来、何も考えず、ただ修羅を追う。ゆく果てには、何もない修羅を。そして、修羅に追い付いた瞬間、満足する。だけど、その後は、ただ虚しいってことに気がつくんだ。……俺は、そんな夜兎にはならない。夜の兎みたいに、夜の方が、昼よりもよく周りのものが見える人間なんかになりたくない。……俺は、強くなる。」

「兄ちゃん、もう強いヨ。」

その言葉に、神威は微笑んだ。

「力はね。……でも、心が……魂が強くなきゃならないんだよ。自分の修羅を、自分で決めれるような人間に。血ではなく、魂(こころ)で。」

神楽は、いまいちわからない、とでも言うように、首をひねる。そんな妹を見て、神威は苦笑いした。

「まだ、難しいかな。……でも、人――人でなくても、何でもいい。何かと戦うときは、兄ちゃんの今言った言葉だけは、忘れないで。」

「……うん。」

首肯する神楽を見て、神威は満足そうに笑った。

――――――――――

――――――

ドゴッ。

「……い……。」

「やられろ！やられろ！やられろ！」

手を叩きながら、地面にひれ伏した神威を、男たちが罵声とともにののしる。

自分のことなんて、もう誰も助けてくれない。御免、神楽。俺……もう、限界だ。

バキッ。

「……。」

あたりが、しーんと、静まり返った。

「誰が……いいコ……だって？」

背筋が凍るような冷たい声に、男たちは震えあがった。

5．夜兎の血（後書き）

「私は自分の戦場を自分で決める。血ではなく、魂（こころ）で。」

この神楽の名ゼリフ、お兄ちゃん譲りだったんですね。（この小説の中では。）

夜兎の血に抗うことを諦めた神威……どうなるのでしょう！？

神楽：お前、別にナレーターじゃないだロ。

神威：それにここ、次回予告伝える場じゃないんだけど？

冬瀬：……ごめんなさい。

6．鳳仙

周りの屍。

血。

腐臭。

屍にたかる虫。

「全員夜兎が何だってんだよ。ヒック！テメェら如き弱い存在が、ヒック！俺みたいな強者に勝てるわけ、ヒック！ないだろ。」

地面に寝そべりながら、グビグビと酒を飲む神威。もう、何日もここにいる。神楽も、神那も、星海坊主も、相当心配しているだろう。もしかしたら、父は帰ってるかも知れない。だけど、そんなことは、今の俺には関係ない。

「かったりーな。でも、帰るしかねーか。」

そんなセリフを口にして、身を起こした神威は、家路をたどった。

――――――――――――――――――――

「ただいま～。ヒック！」

一応、帰りのあいさつを口にする。

その瞬間、廊下から二人の人影が現れた。暗闇の中だったから、一

瞬、小さ砲の影が神楽で、もう一方が神那かと思ったが、違った。
大きい方は、星海坊主のものだった。
「今まで何をしていたんだ！母ちゃんが倒れたんだぞ！」
「ふうん。」
酒を持ちながら、神威はフラリと座敷に上がりこむ。
「お前、何で酒なんか！」
「うるさいなァ。」
振り向いた神威は、不機嫌そうな顔をして、星海坊主を睨んだ。
「何だ、その睨み方は！それと、その酒を渡しなさい！」
星海坊主に、ものすごい剣幕でそう言われても、神威は、「は？」
という顔を作るだけだった。
「俺はアンタの指図なんか受けないよ。……じゃ、ちょっと俺、部屋にいるから。それと、神楽。」
海星坊主の足に、ギュッとくっついて、兄をおびえた目で見つめる神楽に、神威は言った。
「もう、俺の部屋に入ってこないで。」
平然な顔で、そんなことを言った兄に、神楽は恐怖感を覚えた。

―――

ボゴッ！！

人を殴る音が、暗い路地から聞こえてくる。路地を抜けようとしていた人々は、恐れを成し、そこには近づかない。何故なら、「夜兎の主」が、そこにいるから。

「……なあんかつまんないなあ。」

神威が、不満顔で、独り言をつぶやいた。

「それに、人が死ぬのをそのままの顔でみるのもつまんないし。」

そして、思いついたように言った。

「ずっと、微笑んでいようかなあ。死んだ人を、最後まで笑って見送れるように。」

ザッ。

その時、ひとつの人影が、自分に近づいた。

「ぬしが、神威か。」

ドスの聞いた、低い声。筋肉が、服の下で引き締まっている巨体。

……来た。強そうなヤツ。俺の乾きを、うるおしてくれる奴。

―――――――――――――――――――――

立ちあがると、神威は微笑んだ。

……笑いながら戦うって、どんな感じだろ。実験台になってもらおうかな♪

その瞬間、男の手が動いた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「フン。いい線はいっているが、まだまだだな。」

男は、地に伏した神威を見て、薄笑いしながらそう言った。

「喧嘩では通用するかもしれぬが、本物の殺し合いでは通じんな。」

そう言ってから、男は神威を誘った。

「……どうだ、わしと共に来ぬか？殺し合いの仕方を、教えてやろう。」

その言葉に、神威は少しだけ目を大きくした。

7. 心配事

……兄ちゃん、どうしたんだろう。

母が臥せっている床の隣で、神楽は正座をしながら考えていた。

何で、あんなに性格が変わったのだろう。それに、何でマミーが倒れたんだろう。

確か、父は、病気が悪化した、とか言ってた。でも、すぐに良くなる、って。

父の言葉を思い出して、神楽は苦笑する。

わかってるよ。それが、うそなことくらい。

わかってるよ。マミーの身体が、もう持たないくらい。

そんなこと、遠い昔に理解していた。何回も何回も何回も倒れた母は、いったい、何度医者の宣告を受けたことだろうか。「もう、死ぬかもしれない」と。

それでも、マミーは生き続けた。兄ちゃんと私の成長を見守っていようと、ずっと。でも、もう兄ちゃんが変わっちゃったから、死んじゃうのかな。家族の絆が切れたら、生命の糸も切れて、マミーも死ぬのかな。

そんなことを考えていたら、ダメだ。

気分を変えようとして、神楽は頭をブンブンと振る。

「……神楽。」

その時、神那がふと呟いた。

「マミー！？大丈夫アルか！？」

神楽は、起き上がった母に身を寄せた。

「大丈夫よ、この子ったら。」

微笑んだ神那は、神楽に尋ねた。

「……神楽。神威の調子は、どう？」

「な、何の問題もないネ！いつもどおり優しいアル！」

それを聞いて、神那は苦笑する。

「いいのよ、気にしなくて。知ってるわ、あの子が、今、どんな状態か。でも、たまには家に帰ってくる？」

神楽は、しゅんとしながら頷く。

「お腹減ったら帰ってくるアル。でも、このごろは、ほとんど……。」

「……やっぱり、私のせいなのかしら。ごめんね、神楽。」

神那の言葉に、神楽は首を横に振った。

「何言ってるアルか！マミーは私たちを、ちゃんと育ててくれたネ！マミーは、何も悪くないアル！」

弁護するように言う神楽を見て、神那は苦笑いしたが、その後に、肩を落としながら言った。

「いいえ。私のせいなの。私は、本当は何もかも知っていたわ。……あなたが、いじめられていたことも。神威が、仕事場で苦労していたことも。」

「え……。」

神楽は、驚いた顔を作った。

「どういうことアルか？兄ちゃん、仲間いて楽しい、って。」

そう言う神楽に、神那は吐息をついた。

「……違うわ。ホントは、いじめられていたはずよ。あなたは気付かなかったかもしれないけれど、いつも傷だらけで帰ってきた。……あなたも、毎日泥だけで帰ってきた。なのに、私は何もできなかった。何も言えなかった。……私は、母親失格だわ……。」

「そんなことないアル！！」

神楽は、母に抱きつき、兄と、自分と同じ色の髪の中に顔をうずめた。

「マミーは、世界で、一番のマミーネ！宇宙一の美人で、宇宙で一番優しいマミーアル！」

そう褒められて、神那は笑みをこぼした。

「……ありがとう。」

だけど、否定することも、肯定することもなかった。

8．親殺し

そういや、一度、「親殺し」とか言うのを、聞いたことがあったな。

神威は、ふと、昔耳にした言い伝えを思い出した。

親を殺し、親を越すことで一流の夜兎になるという、あの風習……。

ニヤリと笑った神威は、自分の血が騒ぐのを感じていた。

待っていて……。今すぐ、乾きを潤してやるから……。

――――――――――――――――――――

――――

「父ちゃんと一緒に買い物に行ったのは、久しぶりだな。」

「ウン。」

表情がさえない神楽に、星海坊主は眉根にしわを寄せ、何とか元気づけようと、再び口を開く。

「母ちゃんのために、いっぱいいい食材選んだから、ウマいメシを作ろうな。」

「ウン。」

神楽が、うつむきながらそう答えた時――。

ブシューッ！
バサッ。
星海坊主の腕が吹き飛び、肩から鮮血が噴出した。
「……え？」
神楽と星海坊主は、目を丸くし、冷汗を額に浮かべた。
「後ろ見てないね。星海坊主とも恐れられる人が、片腕を取られるなんて。」
その声に、二人は驚愕した。いつもは優しい、あの……神威が……。
「お前……。何を……。」
しかし、その瞬間、神威が再び動いた。鉄の拳が、星海坊主にあたろうとした刹那、星海坊主はその拳の威力を何とか殺し、神威の鳩尾を突いた。
「神威……。お前……。親殺しを……。」
親殺し？
幼い神楽の心に、まがまがしい響きを放つその言葉が、刻み込まれる。
「正解。」

微笑みながら、神威は両手を前に構えた。

「ほら、おいでよ。」

バッ。

二人は、いっせいに動いた。

「神威ィィィイイ！」

目に見えない速さで、二人は攻撃を繰り出す。

「オォラァァァア！」

神楽には、父が不利に見えた。片手がないのだから。しかし、そんなことはなかった。神威を凌ぐほどの圧倒的な強さで、神威を追いこむ。二人の目には、全く「手加減」というものが見えなかった。星海坊主は、本気で神威を殺そうとし、神威も、本気で父の命を奪おうとしていた。

……やめて。二人とも、やめて。

父の左足が、兄の足を捕え、神威はこけ、地面に倒れた。

ダメ……！

父が、兄に、最後の攻撃を加えようとした。

「ダメ！」

神楽は、泣き泣き、星海坊主の足に抱きついた。その瞬間、星海坊主の手が止まった。

「……何してるの、二人とも。やめてヨ。」

神威は、目元を髪で隠し、表情を隠す。そして、バッと立ち上がると、去って行った。

「神楽。」

その時、星海坊主は、はっと我に返った。ぎゅっと唇を結び、おびえた目で父を見つめる娘。

……俺、今、何を……。

両手に視線を移して、星海坊主は愕然とする。

本気で息子を殺そうとしていた自分。……なんてことをしたんだ……。

本能。夜兎の血。

星海坊主は、自分のおぞましい血に、初めて気がついた。

8．親殺し（後書き）

グダグダなのに、見てくださっている方、ありがとうございます＾＾

9．別れの日

それから、パピーは消えた。また、「えいりあんばすたー」の仕事に出かけたのだろう。

兄ちゃんも、それっきり姿を現さなくなり、家ではマミーと私の二人きり。

……嫌だった。兄ちゃんが、兄ちゃんじゃなくなるのは。

嫌だった。マミーが、死んじゃうのは。

嫌だった。これ以上、家族が離れるのは。

でも、ついに、「あの日」が訪れてしまった。

――――――――――――――――――――――――――――――

妙な音で、神楽は身を起こした。

ゴソゴソゴソ……。

誰かが、神威と自分の部屋で何かをしている。

神楽は母を起こさないように、出来るだけ音を立てずに立ちあがり、広間を出ようとした。その瞬間、誰かが自分に気付かずに、廊下を抜け、玄関を後にした。

兄ちゃん！？

あの後ろ姿を間違えるはずがない。

神楽は、靴を履き、傘を持って、家を出、そっと神威の後を追った。

――――――――――――――――――――――――

――――

神楽が神威に追い付いたのは、とある廃墟の前にある、階段の上だった。神威は既に下に降りていたが、神楽が自分の名を呼んでいるのに気付き、足を止めた。しかし、振り返ったりはしなかった。

「に、兄ちゃん！待って！……兄ちゃん！」

吐息まじりに、神威は面倒臭そうに返す。

「……なあに？」

「待って……。マミーが……。マミーが死んじゃうアル。」

神威は、妹を見ずに、そっけなく問う。

「それが？」

神楽は、兄の言葉に衝撃を受ける。

兄ちゃんが、こんなこと言うはずがない……。……この人、本当に兄ちゃん……？

「ぱ、パピーも帰ってこないアル。兄ちゃんがいないと、マミーが死んじゃうヨ。」

「……なら、勝手に死ねばいい。俺は知らない。」

神威が歩き出した。それを見て、妹は急いで、大きな声で叫ぶ。

「兄ちゃん！私も行くヨ！私も行かせて！」

小さなため息をついた兄は、足を止め、傘ごしに、階段の上の神楽を、迷惑そうな顔で見上げた。

「……嫌だ。ついてくるな。俺は、強者だけを求める。弱いお前なんかに、興味はない。」

神楽は、微笑みながら、凄まじい殺気を放つ兄に、肩をびくりと震わせた。

「俺に付いていきたいなら、俺より強くなってから来てよ。今のお前なんか、そこら辺にいるチンピラどもの足もとにも及ばないもん。」

ザァァーッ……。

雨が強くなってきた。

神威は、再び歩き出す。

……兄は、それ以来、妹を振り返ることはなかった。

9．別れの日（後書き）

土方葵の真選組日誌から、一部取りました。

１０．雨空

それから、数ヶ月後。

ザァーッ……。

雨は、容赦なく、傘をさしていない少女を雨雫で突き刺す。少女は、それでもかまわなかった。だって自分は、空を見に来たのだから。空を見れるのなら、濡れようが構わない。

「おじょーさん。」

後ろから、怪しい男たちが、少女に声をかけてきた。少女は、沈黙で対抗する。

「どうしたんだィ、こんなところで。お母さんから、家追い出されたのかィ？」

まだ、答えない。

「おじさん達と一緒に来ない？おじさん達はね、君のような身よりのない子をひきとって、新しい親に売り飛ばす、それはそれは優しいおじさん達なんだよ～。」

少女は、体育座りしたまま、微動だにしない。

男たちは、「グヘヘヘヘヘ」と、下品な笑いをすると、再び少女に話しかけようとした。

「おじょ……。！」

しかし、その瞬間、男の声は、雨にもみ消された。

――――――――――――――――――――

「おじょーさん。」

倒れた男たちの後に、新しく、もう一人、誰かが来た。

「どうしたんだィ、こんなところで。こんな日に、傘もささないで。」

気まぐれに、少女――神楽は答える。

「今日は、雨だからイイネ。」

「そりゃおかしい。傘とは本来、雨をしのぐためにさすもんだ。」

そういう男に、神楽は前方を見続けながら、単調な声で言う。

「雨の日まで傘さしてたらいつまでたっても空をおがめないネ。雨空でもいいから、私も空をおがみたいネ。」

その時、雨がピタリとやんだ。……違う。誰かが、自分に傘をさしてくれたのだ。

男は、「フン」と鼻で笑うと、神楽に微笑んだ。

「カゼひくぞ。」

神楽は振り向き、父、星海坊主に抱きついた。

「パピー！！」

――――――――――――――――

――

一年中、雨ばかり降るジメジメした街。そこが、俺達の巣だった。日陰でしか生きられない連中が集まる魔窟……。ハタから見れば汚いドブ川でも、ドブネズミにしは住みやすい場所だ。

「パピー。」

神楽が、ふと口を開いた。

「次は、いつ帰ってくるネ？」

俺は、そんなことを尋ねる神楽に、溜息をつく。

「今帰ってきたのに、もうそんな話か。」

神楽は、俺の義手を、ぎゅっと握った。残念ながら、神楽の手のぬくもりは、義手からだと感じられない。

「……もういかないでヨ、パピー。」

俯きながらそう言う神楽に、俺は視線を移した。

「私、もう一人でマミーの苦しむ姿見たくないヨ。兄ちゃんも帰っ

てこないし、パピーも帰ってこない。……私、寂しいネ。」

俺は、何も言えない。だが、しばらく考えると、口を開いた。

「母ちゃんの病気も、きっともうスグよくなる。兄ちゃんももうスグ帰ってくる。それまで、俺が金稼いで、お前は母ちゃん護る。そう約束しただろ？」

神楽は、ウン、と、元気なく頷く。

俺は、もう、何も語る気にはなれなかった。

１０．雨空（後書き）

原作にあった話です。

11．母の死

数年後。

「……神楽。私、もうダメかもしれないわ……。」

床に伏せっているマミーがそう言った瞬間、私はマミーに抱きついた。

「何言ってるアルか！！マミーはまだ元気ヨ！！私がマミーを護るネ！兄ちゃんとパピーがいない分、私が！！」

マミーは、今までに見せたことないくらい穏やかな笑みを浮かべた。

「……フフ。ありがとう、神楽。あなたは、家族の中で、一番責任感がある子なのかもしれないわね。」

それから、私の頭に手をのせ、消えそうな声で呟き始めた。

「……神楽。今度、兄ちゃんに会ったら、言っておいてね。私、あなたたちの母親でよかった、って。時には嫌なこともあるかもしれないけれど、負けないで。なぜなら、あなたは、私とお父さんの子供なんだから、って。」

それって……。まるで、遺言みたいだ。

「ま、マミー……？」

「あとね、神楽。あなたにも言うことがあったわ。」

マミーは、私の髪を、よしよしと撫でながら、言葉を発した。

「あなたは、自由に生きて。まるで、鳥が自由に空を飛ぶように。何物にも束縛されず、自由に。」

そう口を開いた瞬間、マミーは激しい咳をした。

「大丈夫アルか！？」

「……え、ええ。平気。」

ふぅ、っと肩を落とし、マミーは続けた。

「神楽。今まで、本当にありがとう。……私、あなたの母親でよかったわ。それとね……。」

私は、マミーの顔を覗き込んだ。その顔から、どんどん生気が失われていく。

「みんなに……。兄ちゃん——神威と、お父さんに言っておいて。愛してるって。もちろん、あなたもよ、神楽……。」

マミーが、目を閉じた。私は、マミーを抱き起こすと、ギュッとその身体を抱きしめた。

「ダメヨ！マミー！死んじゃダメ！」

微笑んで、マミーは言った。

「……みんなに、よろしく。愛してるわ、神楽。……大好きよ。」

「マミー！！！！！！」

それが、マミーの最後の言葉だった。

冷たくなったマミーは、それ以上、何も言わなかった。もう、動かなかった。もう、私たちに、「愛してる」ということも、なかった。

１２．星を出る

今、私は、船にしがみついている。

無一文の私が、この星から出るには、こうするしかないのだ。

この星を去ることは、嫌だった。兄ちゃんと、マミーと、パピーと一緒に暮らした思い出が詰まった場所だったから。

でも、ここに残るのも嫌だった。家族も誰もいない、一人ぼっちの暮らしなんて、嫌だった。

ブオーン……。

船が宙に浮き、

フッ。

転送された。

……マミー。私、自由に飛んでみるヨ。新しい家族を……探してみるアル。

――――――――――――――――――――

異国の船が浮かぶ星。ここは……どこ？

「あの。」

隣にいた、パンチパーマの男に声をかけてみた。

「ここは……。なんて言う星アルか。」

男は、私の肌と、服と、傘を見て、少し驚いた顔をした。

「夜兎……。」

「？」

私は首を傾げる。男は、慌てて、私の質問に答えた。

「あ、ここは、地球っていう星だよ。」

「地球……。」

どこかで聞いたことのある名前だ。そうだ。パピーが、この星によって、月見饅頭を買ってきてくれたんだ。

「……ね、ところでお譲ちゃん。奉公先とか、決まってるの？」

「ウウン。」

その言葉に、男は満足に頷いた。

「じゃあさ、ウチのところで働かない？そしたら、鮭茶漬けを毎日三食食べれるよ。」

それを聞いて、私は驚いた。

「マジでか！三食鮭茶漬けアルか！！！」

男はウンウンと首を縦振る。

「どうだい？」

「わ、私、そこで働くアル！！」

これが、間違いだった。

――――――――――――――――――――――――

――――

最初は、ちょっとケンカの仕事を引き受けるだけだった。でもだんだん仕事の内容は悪化し、人を殺せと言われるようになってきた。

だから、私は逃げてみた。

そしたら、もう一つの間違いを犯してしまった。

人生最悪の間違い。でも、人生最良の出会いだった。

１３．人生最悪の間違い∩人生最良の出会い

ヤバい！追い付かれる！

私は、全速力で、江戸の町を疾走する。

が、その瞬間。

「あぶね！」

男の声が聞こえた。一瞬、銀髪の男がスクーターに乗っているのが見え、その後ろには、メガネをかけた少年が。

キィィイイ！ドン！

スクーターが、私と衝突し、私は倒れこんだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

これが、私と万事屋銀ちゃんこと坂田銀時、そして、メガネツッコミ兼雑用係、志村新八との出会いである。

ここから、私の新しい人生が始まった。

１３．人生最悪の間違い∩人生最良の出会い（後書き）

短いですが＾＾；

次回で最終話です

１４．新しい家族

「うーさぎ、うさぎ、なーに見てはーねるゥ。十五夜おーつきさーん、見てはーねーるゥ♪」

「いきなり何だよ、神楽。」

ふいに歌いだした神楽に、銀時と新八は首をかしげた。

「今日十五夜アル、お月見しヨ。」

はぁ？と、首をさらにひねる銀時。

「そんな金ねーよ。」

が、その時、ピンポーン、と、誰かが万事屋の扉をたたいた。

「依頼か？……新八、出ろ。」

命令されて、新八は、気の進まなそうな顔で、言われたとおり動く。

ガラリ。

引き戸を開いた場所には、長髪のウザい男と、奇妙な白いペンギンらしき生物が立っていた。

「か、桂さん……。」

「……これを届けに来たのだが、一緒に今晩、食わぬか？」

桂は、新八に、小さな包みを渡す。

「え？」

新八は、手渡された小包を、そっと開けてみる。饅頭が、箱の中にぎっしりと詰まっている。

「これ……。」

「いやあ、今日は十五夜ということで、どうだ？お前たちも。」

銀時と神楽が、久しぶりに食いものにありつけるということで、珍しく桂に愛想よく話しかける。

「いやだなぁ、ヅラ様ァ。来るなら来るって言ってくださいよォ！」

「そうヨ、ヅラ様。言ってくれないと、警察に呼ぶところでしたヨ。」

ピーポーパーポ！！！！！

「カァツラァァァァ！！ここに貴様がいるとの目撃情報が入ったぞォォォ！出てこいやァァァ！」

ドスの聞いた、低い声音。……聞いただけでわかる。真選組副長、土方十四郎の声だ。

「あ、悪い。もう通報してたよ。」

銀時が、思い出しかのように、ぽつりと言った。

「何だとォォォ！おまえらなんてことしてくれたんだ！それにヅラ様じゃない桂だ！」

桂が頭を抱え、銀時にアッパーカットを食らわせる。

「あ、いやしたゼィ。あそこでさァ。」

気の抜けた声。これは、一番隊隊長の沖田総悟だろう。そして、その隣には、

「お妙さぁぁぁん！どこですかァァァ！」

ゴリラストーカーで知られる、局長、近藤勲。

「近藤さん。頼むから、女じゃなくて桂探しそう。……総悟が見つけたらしいけど。」

「お妙さぁぁん！」

「ってアンタ人の話聞いてんのか！？」

土方も、いい加減近藤の行動に嫌気がさし、危うく刀を抜きそうになる。

「てなわけで、さぁらばぁー！」

仲間割れしかかっている真選組に乗じ、桂は逃げた。

「待てェェェ！桂ァァァ！」

ドォオン！

沖田がバズーカを起動させた瞬間、万事屋の屋根が吹っ飛ぶ。

「おいィィィ！」銀時が絶叫する。「なんてことしてくれて……。」

が、そこで銀時の言葉が止まった。銀時の視線の先には、髪の毛がアフロになった女――さっちゃんが立っていた。メガネは、爆風でコナゴナになっている。

「……何してんの、お前。」

「え？銀さんをストーカーしていたら屋根が吹っ飛んだの。」

さっちゃんはそう答え、近くを通っていた、端麗な美少女、お妙に抱きついた。

「銀さん！私に会いに来てくれたのね！」

「おーい。俺こっち。それ胸がまな板みたいな女。」

銀時の言葉に、お妙の頭に血管が浮かび、銀時はお妙の暴行被害を受け、その後ろで、声援を送る近藤がお妙に打ちのめされる。

「何だ、ぬしら。もう祭りを始めたのか。」

そこに現れたのは、黒いノースリーブの着物に身を包んだ、遊郭吉原の番人、月詠だった。

「……ほれ。饅頭を持ってきたのじゃが。」

月詠が手に持っていたのは、小さな袋だった。神楽はそれを見て、

「さすがツッキーアル！」と言い、袋を受け取った。

「今日はお月見ヨー！！」

にぎやかな江戸の町、かぶき町に、神楽の嬉しそうな声が響いた。

――――――――――――――――――――

「って何で俺たちまで食うんだよ。」

口いっぱいに饅頭をほおばる沖田に、土方が不満そうにいう。

「あまってるって言うんですから、別にいいんじゃねェんですかィ？」

満天の星空に、美しい月が昇り、万事屋の屋根の上で月見の饅頭を食べる人々を照らす。

「銀さん、私、銀さんと一緒にお月見できるなんて、これほど嬉しいことはないわ！！」

メガネをかけていないさっちゃんが、月詠に言う。

「わ、悪いが、わっちは銀時ではないぞ。」

月詠は少し引く。

その隣では、新八とお妙が、姉弟仲良くもちを口に入れている。

「あ、これ、おいしいです。」

「そうね、新ちゃん。」

そう言ってから、隣でお妙をじっと見つめていた近藤を踏みつぶす。

「おーい！アンタら！」

ふと、下の階から声が聞こえた。スナックお登勢のオーナー、お登勢の声である。

「酒はいらんのかィ？キャサリンと一緒に飲んじゃうけど。」

それを聞いて、銀時の瞳がキラリと光り、お登勢が持っていた「鬼嫁」というラベルのはってある瓶を奪った。

「おし！神楽！飲むぞ！」

「……銀ちゃん、私酒飲む歳じゃないアル。」

神楽はそうつっこんだあと、微笑んだ。

「でも、銀ちゃんが飲むなら、私も飲むネ！」

「チャイナ。お前未青年だろィ。」

と、沖田がくぎを刺す。

「お前だって飲んでただロ。」

「俺は年齢不詳なんでィ。」

いきなり、二人の闘争が始まる。

それを見て、全員が苦笑し、やがて大笑いし始めた。

江戸の夜空に、陽気な笑い声が響いた。

――――――――――――――――――――

『あなたは、自由に生きて。まるで、鳥が自由に空を飛ぶように。何物にも束縛されず、自由に。』

マミー、私、今、自由に生きてるヨ。

『これだけは忘れないで。それは、時には差別されたりして、辛いこともあるかも知れない。だけど、そんな壁を乗り越えれば、きっと、誰かが待っている。きっと、自分を認めてくれる誰かが、待っている。』

兄ちゃん。私、見つけたヨ。壁を乗り越えて、私を認めてくれる人を、やっと見つけられたヨ。

銀ちゃん、新八、定春、それから、ムカつくけど、ゴリラやマヨラーやサドや地味や、姉御や、ババアや猫耳や、ヅラやエリーや、ツッキーや、さっちゃんや、もう、数えきれない人たち……。

兄ちゃん、マミー、パピー。私、みんなが帰ってくるまで、待ってるから。

いつまでも、待ってるから。共に在り続ける人とともに……。

そう、私の、新しい家族と共に……。

１４．新しい家族（後書き）

終わりました。
最終回です＾＾
読んでいて下さった方々、こんなグダグダな小説なのに、読んでいただいて、本当にありございました！！

暇があれば、また始めるかもしれませんが、その時もよろしくおねがいします！！

ＢＹ　ＦＵＹＵＳＥ　ＳＨＩＨＯ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9177u/

銀魂――遠い記憶――

2011年7月29日18時03分発行